

文献センター通信

第 39 号
2017 年 6 月 30 日
一部 100 円

【新】文献センターだより

* 「八街だより」改題

これまで毎号掲載してきた「八街だより」ですが、センター運営委員・古屋が富士宮に転居したことにより、今後は八街の報告に加えて、富士宮での出来事も報告していくこととするため、今号より「文献センターだより」と改題して再スタートします。(古屋)

○ 3 月某日 新宿事務所にて 3 名で打ち合わせとセンター通信の発送作業。古屋の富士宮転居+プロジェクト(下記参照)に向けて、今後のセンターの方向性など話し合い。これからの 10 年でどこまでできるか。

○ 5 月某日 いよいよ富士宮に転居。ふもとの家から車で 30 分ほどの場所。生活道具などを借りることもあり、ふもとの家へ。龍さんに転居の挨拶。

○ 5 月某日 タイ・バンコク在住のオランダ人 e f さんが書庫を訪問。以前より見学したかったそう。彼はアムステルダムのアジア担当

で、英語版「リベロ」など、とても興味深そうに見入っていた。この日が引越しの翌日ゆえ、かなりの慌ただしかったが、こういう海外のゲスト案内の機会は増やしていきたい。

○ 5 月某日 昨年からふもと家で奥沢さんと増山さんとでしてくれていた庭木の剪定作業で出た枝木を薪用(薪ストーブを導入予定なので)に引き取りに。近所の方に軽トラックを借りたが、すぐに荷台がいっぱいに。龍さんも手伝ってくれる。

○ 5 月某日 奥沢さん、佐藤さん、増

主な内容

- 【新】文献センターだより……………1
- アナキズムとアート(足立元)……………2
- 歌の別れ―大道寺将司(武智忍)……………4
- ウクライナの 10 月大革命(マフノ)……………5
- ヨーロッパスケウオットガイド③……………7
- 新刊紹介『仮面のダンス』……………8

山さんが来宮。この日は宿泊棟の片付け。もう使えない布団やその他 10 年溜まっていた物を大量に処分。四人いると捗る。訪問時、龍さんの応答がなく、少しヒヤリとするも、ただ就寝していただくとわかりホッとする一幕も。剪定作業のおかげで、庭から駿河湾が見えることをこの日初めて知る。休憩中、下から吹く風がとても心地よい。

富士宮プロジェクトについて

昨年 6 月(通信 35 号)にご報告した富士宮プロジェクト。書庫がある富士宮の「ふもとの家」の宿泊施設を生かした交流の拠点をめざし、課題である「世代交代」の解決手段の一つになればということからの発案でした。

しかし、その後に数回ほど富士宮に行くことで見えてきたことは「施設

老朽化」と「龍さんの体調」でした。当初は簡単な清掃で使えると思っていた宿泊施設は水周りの工事等が必要なることがわかり、また龍さん自身が高齢であることから交流会等がお身体の負担になってしまうようでした。

そこで考えたのが、ふもとの家に近くに住むという計画。幸い、家族の理解も得られ、家も見つかり、今回の一家での転居となりました。今後すぐ交流拠点を、とはなりません、じっくりと(我が家が改修せねば住めない古い家を借りたということもあり)取り組んでいくつもりです。とはいえ、前述のように最近はお断りせざるを得なかった海外からのゲストを案内したり、書庫が近いゆえに資料整理はもちろんだ、データベース化や資料紹介などの情報発信をどんどん進められるようになります。引き続きのご支援をお願いいたします。(古屋)

お知らせ

静岡で開催の墓前祭の日程が決まりました(詳細号)。

9 月 16 日(土) 11 時〜墓前祭(香谷霊園)、14 時〜講演会(講師・飛矢崎雅也氏)

アナキズムとアート 最近の動向から

足立 元

◇はじめに

一見親和的に見えるアナキズムとアートの関係には、微妙なところがある。自由・平等・相互扶助を理念とするアナキズムは一種のアート（表現）だと言えるかもしれないが、一方で、ア

トは必ずしもアナキズムではないからだ。どんなアートにも多かれ少なかれプロパガンダの要素があるし、業界の中でしか通用しないモノもあるし、中には劣悪など言っても過言ではない商業主義もある。つまり、アートは必ずしも社会を変えるような運動体ではないし、思想を伴うものではない。

それでも、アートの一部には、アナキズム的なものを見出すことができるだろう。それはアナキズムそのものではない。だが、歴史的なアナキズムが遠ざかった今、それを振り返る視点を提供するものとして、あるいは新しいアナキズムとして、様々なアートの形をとって現れているのではないだろうか。ここでは、最近の展覧会の動向から、

いくらかでもアナキズムを備えたアートを紹介することで、今日のアナキズム運動と研究に資するかもしれない見方を提供したい。

◇原爆体験から環境問題へ

殿敷侃（とのしき・ただし、1942—1992）という名前を知っているのは、よほど現代アートに詳しいか、広島・山口にゆかりのある人だけだろう。1980年代には国際的にも注目されたようだが、近年の美術事典類にその名は全く残っていないので、忘れられたアーティストと言っても過言ではない。しかし、その作品は、すぐれて重く、熱い。広島に生まれ、幼いときに被爆



した経験を、同時代の国際的な環境問題にまでつなげて、作品化していた。

たとえば、絵画では、原子爆弾で亡くなった両親の衣服、父親が最期に被っていたと考

えた鉄兜が、極めて緻密に描かれる。見ているだけで気が遠くなりそうほど、サビやヒビの一つ一つが描き込まれている。その営みは、原爆犠牲者への悼みでもあろうし、自らの後遺症の肉体と精神の痛みからの解放もあつたのかもしれない。

インスタレーションでは、海岸で廃棄物を集め、固めて地中で燃やして、巨大な黒い球状の「お好み焼き」にするという公開制作の作品を残している。子どもたちは楽しそうに見ているが、それは人間の手によって作り替えられた地球の象徴だ。殿敷の胸のうちに、ユーモアを超えた、どこか嗜虐的なニヒリズムが、なかったとはいえない。誰も否定できない普遍的な理念を



訴える作品のうちに、その理念を裏切るようなユーモアがある。

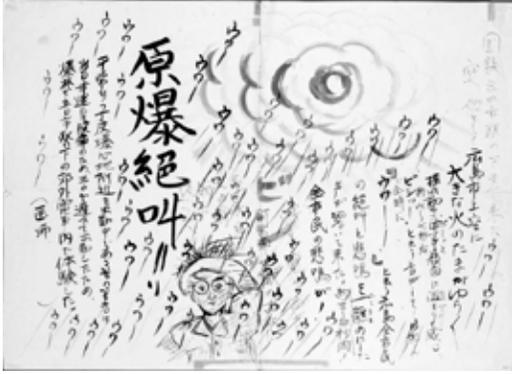
今回の広島市現代美術館における回顧展で示されたのは、再現的な絵画から始まって、ポップな抽象絵画、版画、インスタレーション、そして参加型作品に至る、めまぐるしいスタイルの変遷だ。実際、何が代表作なのか捉え所がない。また、殿敷が50歳で急逝した後、90年代のアート業界では、社会性のある表現が今ほど評価されなかった。それゆえに忘れられたのかもしれないが、この展覧会では、いかに流行から外れて長らく忘れられても、本当に力強い作品は甦るといふことを示している。

●「殿敷侃 逆流の生まれるところ」展（広島市現代美術館、2017年3

月18日～5月21日)

◇カラフルな原爆像

広島市から車で1時間半ほど、宮崎駿が「ポニョ」を構想した場所として知られる風光明媚な瀬の浦。そこには、精神障害者のための福祉法人が運営する、一風変わった展示施設がある。ここ瀬の津ミュージアムは、もともと障害者の作品を展示する目的で作られたのだが、障害とは何かを問い、そこから出発することで、健常者の作品も障害者のものと並べている。そこには障害者施設ならではの平等と相互扶助を



めぐる文化的実践があるし、自由なアート展としても刺激的な(ちよつと普通の美術館ではありえないような)内容の展示会を立て続けに企画して、東京でも近年話題になっている。

2017年夏の企画展は、「原子の現場」というタイトルで、原爆の直接/非直接の体験をテーマに、故人を含む1920年代生まれから、若い人で2001年生まれ、16歳まで、16人(組)の、もちろん障害者を含めた風変わりな出品者からなる。会場ではまず、ABC・反戦・反核・版画コレクティブによる、核戦争をテーマにした木版の原爆が迎えてくれる。原爆は、黒い、反転した像であるが、まさに世界の鏡であり、木調の猥雑な展示空間に誘うものだ。

次に、原爆を実際に見た人びとの絵に驚かされる。わたしたちは原爆を、たとえばキノコ雲の写真や丸木夫妻の『原爆の図』(1950年)によって、モノクロームのものとしてイメージしているのではないだろうか。だが、本当にそれを見た人たちが絵で証言するのは、原爆が実は虹色だったり、ピンク色だったりした、ということである。

とはいえ、「原爆を視る」という体験は、決して直接の当事者だけのものではない。言ってみれば、それは人類史的な体験だからだ。直接現場に居合わせなかつた者たちもまた、原爆を描いてきた。そこ

には他者に寄り添う想像力が限りなく求められるが、だからこそ原爆はアトがくだらないものからより人間的なものになりうる契機を与えてくれるのかもしれない。

本展の出品者のひとりに、広島のカタロ(1949年生まれ)という、清掃員をしながらモップやバケツの絵を描く有名なオジサンがいる。ほとんど知られていない彼の色彩のシリーズは、原爆ドームを荒々しく描いたもので、一般に知られる叙情的な印象とはずいぶん異なる。その中にはベニスの形をした原爆ドームも見える。それは、広



島という土地の歴史が持つ被害と加害の二重性を示すものだろう。また、カタロによる、殿敷へのオマージュとして作られた、頭に被ることができるサイズの「お好み焼き」もあった。ふざけていると憤る向きもあるかもしれない。しかし、もしも諧謔がなければ、この悲劇に誰が立ち向かえるだろうか。少なくとも、思想や実践とは違う、アートによる戦い方があることを、この展示会は教えてくれる。

●「原子の現場」展(瀬の津ミュージアム、5月3日～8月20日)

連載 (11) レクイエム

歌の別れ—大道寺将司
「反日・狼」を名乗った
戦士、俳人の死を悼む

武智 忍

五月二四日、午前十一時三九分。確定死刑囚・大道寺将司は東京拘留所で息をひきとった。六八歳、多発性骨髄腫による病死である。

「東アジア反日武装戦線・狼部隊」を名乗り、昭和天皇の戦争Ⅱ戦後責任を問い、爆殺を試みたが失敗。転じて三菱重工、本社ビルを爆破。死者、八人を出したとして死刑が確定していたもの。

獄中で多くを学び、発信し、日本古来の定型詩・俳句に目覚めた。

〈大道寺、18歳のころ〉



その集大成『棺一基 大道寺将司全句集』(太田出版・二〇二二年)は、一行詩大賞を受賞するなど、政治犯としては異例の評価を得ていた。

ここでは大道寺氏の「歌との出会い—そして別れ」を接点とし、激動の時代を生き、戦った、氏の航跡を偲ぶ。

*

前段としての「異空間の俳句たち」

一九九年。死刑囚の俳句を集めた『死刑囚 いのちの三行詩 異空間の俳句たち』(発行・海曜社 発売・雄山閣出版)が出た。

反響が大きく、句集としては異例の二千部完売。一年後、朝日新聞の人気コラム、大岡信「折々の詩」に、一週間、連続して載せまます—という知らせが編集部から届いた。

予告通りの連載となったが、在監中の死刑囚の句は除外。最多(六句)を掲げた大道寺の句も黙殺された。

これが大岡氏の「営業」なのだろう。ならば—、というので発行されたのが『大道寺将司句集 友へ』(企画・海曜社 発行・ぱる出版)である。

一序に代えて 魂のありか

辺見庸

解説 すべての人に代わって
叫んでいる一人の声—

齋藤慎爾

略年譜 太田昌国

発行期日は〇一年、五月十九日。句集の立ち位置を示すために、少し長い「あとがき」を全文引用する。

「あとがきにかえて」

一九九五年十二月、木村修治が刑を執行された。数通の遺書は、刑死の直前、抵抗を放棄することを条件に残されたものだ。一枚の断片には「将司 伸二 シャコ がんばれ」の十一文字があった。生き残るものに向けて、木村が発した最後のメッセージである。

一九九六年十二月、遠く岐阜の獄中にあつた友人のシャコ(宇賀神寿一)が病気で苦しんでいることを知り、大道寺は初めて「十七音の器」にみずからの思いを託した。

友が病む 獄舎の冬の 安けしを

捕われて二二年、死刑が確定して九年目の冬である。

本書は「事件の被害者との関係性において存在する自分が、晴れがましい句集など」と大道寺が固辞するのを、

あえて刊行したものである。その経由を含め、出版の責任は私にある。

*

俳句という定型詩の小宇宙は、自己完結の世界。そこだけに自由が約束された精神世界の解放区である。

病に侵された者。両足を縛られた者にも、精神の自由は保障されている、はずである。

そこに生きてくれ、と私は願った。

*

はるか昔。

各派の旗印が行き交った法政大学・全国集会のキャンパス。

関西弁のイントネーションに、にこやかに反応した運命の男と行きあつた。

一方、現役学生のアジ演説を聞き流しながら、私は、自身の「二十代の狂奔」の終わりを感じ続けていたのだ。

永い隔絶よさらば。

大道寺よ、さらば—。

私が死んだら／悲しみの鐘を
鳴らすな／私の挽歌は、陽ら
にうたわせよ 岡倉天心

ウクライナの二〇月大革命

ネストル・マフノ著 (森川莫人訳)

訳注 本邦訳は「Alexandre Skirda 編『The Struggle Against the State and Other Essays』 Paul Sharkey 英訳『AK Press 刊 (一九九六年) の第一章の重訳である。原文はウクライナ語で読むウクライナ語』 <http://www.spunk.org/texts/writers/makho/sp001781/chap1.html>



一九一七年一〇月はロシア革命における大きな歴史的分岐点である。都会と地方の勤労者が自分たちの生活とその社会的・経済的遺産を掌握する権利を自覚するようになったためだ。その遺産とは、土地の耕作・住宅・工場・鉱山・交通、そして最終的には教育である。特に教育は、我々の祖先からこうした財産全てを剥奪するために使われてきた。

しかし、我々からすれば、ロシア革命の内実全てを見れば、全てを一〇月に要約してしまうことは的外れである。実際、ロシア革命はそれ以前の数ヶ月間で計画されていたのだ。この期間、地

方の農民と都会の労働者は本質を理解していた。確かに、一九一七年の二月革命は勤労者にとって経済的・政治的解放のシンボルとなった。しかし、彼らはすぐに気付いた。二月革命は、進展するにつれ、墮落した自由主義ブルジョア階級の特徴を採用するようになり、それ自体では、社会活動計画に着手できないと判明した。そこで、勤労者は二月革命が課した制限を即座に振り払い、その疑似革命的側面・目標との繋がりを公然と断ち切ることにしたのである。

ウクライナでこの活動は二つの形を取った。当時、都会のプロレタリア階級に対するアナキストの影響は貧弱で、さらに、彼らは現実の政治政策と国内問題に関する情報を持っていなかった。そのため、社会革命党右派とブルジョア階級との同盟を追い出すのであれば、革命遂行に繋がる戦いにとっては、ボ

ルシェヴィキを権力の座に祭り上げることがすぐにでも必要だと見なされたのである。

一方、地方、特にウクライナのザロージヤ地域では、独裁政治の中であっても自由の精神は一度たりとも絶滅しなかった。革命的勤労農民は、封建的地主と農村富農層から出来るだけ早く解放されるために革命的直接行動に訴えることこそが自分たちの最も重要な最も基本的な義務だと見なし、この解放こそが、社会党—ブルジョア同盟に対する勝利を早めてくれるだろう、と確信した。

だからこそ、ウクライナ農民は攻撃的になり、ブルジョア階級の武器を奪取(特に、一九一七年八月にペトログラードで一揆主義者コロニーロフがデモを行っている最中に)し、大地主と富農層による二度目の年次地租支払いを拒否したのだ。(実際、大地主・富農層同盟の執行官は、この問題を裁定する国民議会の召集まで政府の現状維持を守るためという名目で、不動産所有者のために土地を保持すべく農民から土地を取り上げようとした。)

そして、農民は立ち上がり、封建的

地主・農村富農層・修道院・国有地の不動産と家畜を奪取した。これを行う中で、農民は常に、財産を管理する地元委員会を立ち上げ、様々な村落とコミューンの間で財産を共有しようとした。

本能的アナキズムが、ウクライナの勤労農民の計画全てをはっきりと照射していた。これによって、国家権力全に対しての率直な憎しみ、つまり自分たちを解放するという明確な大望に付随する感情が爆発した。実際、この大望は農民の間で非常に強いのだ。本質的に、これを一言で言えば、中央当局が送り込んだ憲兵隊や治安判事のようなブルジョア権威を真っ先に排除する、ということだった。ウクライナの多くの地方で排除が実行された。排除の実行方法は数多くある。エカテリノスラフ(現在のドニプロペトロウシク)・ヘルソン・ポルタヴァ・ハルキウ・タヴリポル(Tavripol)の一部といった地域の農民は、憲兵隊を自分たちの村落から追い出した。また、逮捕権を剥奪し、逮捕には農民委員会や村落集会の許可を必要にした場合すらあった。警察は最終的にこうした委員会や集会の決定

を擁護するようになった。治安判事の数が仕事にに応じて減っていくまでにさほど時間はかからなかった。

農民自身が、あらゆる犯罪と争議を審判するために村落集会や特別会議の席に着いたことで、中央当局が指名した治安判事の司法権は全て無視されるようになった。治安判事は時として全く信頼されなくなり、逃げ出したり隠れたりせざるを得なくなった場合も多かった。

自分たちの個人的権利と社会的権利についてこのようなアプローチを取ったため、農民は必然的に、「全ての権力をソヴィエトへ」というスローガンが国家権力に転じるのではないかと恐れるようになった。こうした恐怖は、多分、都会のプロレタリア階級の間ではそれほどはつきりしていなかったと思われる。都会のプロレタリア階級は農民よりも社会民主主義者とボルシェヴィキに支配されていたのである。

農民にとつて、地元ソヴィエトの権力とはソヴィエト諸機構を自律的地域ユニットに転換することであり、その基盤は新社会建設のための革命的提携と労働者による社会経済の自己決定に

あった。このスローガンにこの種の建設を当てはめながら、農民はスローガンを文字通りに適用し、拡充し、社会革命党右派・士官候補生（自由主義者）・君主制支持派の反革命の不法侵入に対してスローガンを防衛した。

つまり、農民は一〇月の前にライニングをしていたのだ。農民は一〇月以前に多くの地域で封建的地主と農村富農層への農地使用料の支払いを拒否し、集团的にその土地と家畜を奪取し、工場と会社の掌握について何らかの計画をするよう都会のプロレタリア階級に代理人を派遣した。その目的は、兄弟のような繋がりを作り、勤労者の新しい自由社会を共同で構築することだった。

この時点で、ボルシェヴィキと社会革命党左派は「一〇月大革命」という考えの実行を支持していなかった。後になって同意するものの、この時点では、これらのグループ・組織・中央委員会はこの考えを荒々しく批判しさえしていた。一方、ウクライナ農民に関する限り、一〇月大革命は、特に政治年表で高い地位を与えられているが、農民が大分前から進めていたことの一章のようなものだった。

一九一七年八月には既に、ウクライナの多くの場所で革命的農民が積極的闘争を始め、非常に好ましい条件で都会のプロレタリア階級を支援していた。一〇月の出来事の中で、ペトログラードやモスクワといった大都市のプロレタリア階級は、兵士や都会近隣の農民同様、アナキスト・ボルシェヴィキ・社会革命党左派の影響下にあったが、こうしたプロレタリア階級は、単に農民が行ってきたことを合法化し、もっと精密な政治的表現を与えたに過ぎない。

プロレタリア階級版の一〇月の反響がウクライナに届いたのは一ヶ月半後だった。当初は様々なソヴィエトと政党の代理人が出したアピールに、そして次にはロシア・ソビエト共和国人民委員会議の布告に、ウクライナ農民は氣後れしており、任命された役職に参画していない、と書かれていた。裏の意図は明らかだった。

赤軍の集団がウクライナに現れたのはこの時だった。大部分がロシアからやって来て、町を攻撃し、ウクライナ中央ラーダのコサックが管理する通信センターを破壊した。コサックは排外主義に大きく影響されていたため、ウクライ

ナ労働者がロシアの同志と関わりを持つてるといふことも、結局は、その社会的・政治的独立のために戦うべく待機していた勤労者が革命的的精神全体を正しく理解できるといふことも、理解できなかった。

十周年に当たり、一〇月大革命をこのように分析すると、ウクライナで我々が達成したことは、一九一七年後半にペトログラードやモスクワといったロシアの大都市で行われた革命的労働者の行動と完全に調和していたと強調せねばならない。

一〇月の遙か以前にウクライナの片田舎で示された革命的信念と熱狂を記録する一方、我々は、一〇月の出来事でロシアの労働者・農民・兵士が示した決断力と活力を寸分違わず尊敬し、それに高い敬意を示す。

過去を再検討する中で、何かと一〇月に熱中するだけで、現在に目を向けないままにしておくわけには行かない。また、一〇年経った後もなお、一〇月に十全に示された諸思想が、一〇月以降にこれらの諸思想の名を借りて権力を手に入れ、ロシアを支配している人々によって嘲笑されているという事実を

嘆かざるを得ない。

我々は、一〇月の勝利のために戦い、現在監獄や強制収容所でやせ衰えている全ての人々に自分たちの悲痛な連帯を表明する。拷問と空腹下にいる彼らの苦難は我々に届いている。この一〇

月革命十周年にあたり、我々は、日々の喜びの代わりに大きな悲しみを感じ

ざるを得ない。

革命的義務の問題として、我々はソ連の国境を越えて批判の声を再び上げる。

「二〇月革命の子供たちに自由を、組織を作り思想を広める権利を返せ！」

労働者と革命闘士に自由と権利がなく、ソ連はその最良の部分を窒息させ

死に至らしめようとしている。ソ連の敵はこれ喜び、世界規模であらゆる

手段を使って革命を根絶し、それと共にソ連を殲滅しようと準備しているのだ。

〔労働者の大義〕第二九号、一九二七年一〇月、九〜一一ページ〕

ヨーロッパ・スクウオット／自主管理スペース・ガイド ③ 成田圭祐 Can Masdeu (バルセロナIIカン・マスデウ) 編

スクウオットというと、落書きだらけで、騒々しい音楽が地下から轟い

てくるようなビルがイメージされることが多いかもしれない。確かにそのようなスクウオットは多い。ただし、農村部や都市近郊の田園地帯に存在する

例も少なくないという事は強調しておきたい。スクウオットの運動や文化が、まるで黒ずくめのパンクスによって牽引されているかのように捉えられてしまうと、本質的なところが伝わらない。ということで今回は、バルセロナのコレセラ自然公園内にある、黒い服で暮らすには全くもって不向きな、土とともに生きるスクウオット「カン・マスデウ (Can Masdeu)」を取り上げ

る。(スペイン語圏での呼び名にならなくて、以下「スクウオット」は「オクパ (Okupa)」と書く)

バルセロナ中心地から地下鉄で約30分、カニエレス駅から20分ほど山道を歩いて行くと「カン・マスデウ」に到着する。かつてはハンセン病患者の療養所だったという古くて貫緑のある建物は、城のように要塞のように見える。建物の前方には広大なパーマカルチャー農園が広がり、多種多様な野菜やハーブが持続型農業によって育てられている。25人が暮らす「カン・マスデウ」には、居住部屋の他に、共同キッ



チン、イベント・ホール、自転車修理工房、食物貯蔵庫などがあり、一般開放する日曜日には、0円ショップやライブパーティーなども開かれ、採れたての野菜を使ったランチの提供もおこなっている。日曜のランチは毎度長い列ができるが、配給場所では地元のミュージシャンの演奏などもあり、バルセロナの町を見下ろす景色も素晴らしいので、待つことは全く苦にならない。建物の壁に絵描かれている、世界的に有名なストリート・アーティスト SWOON の作品も楽しめる。トイレはもちろんコンポスト式で、電気はソーラー発電。洗濯槽





と自転車を含ませた人力洗濯機もある。太陽光で熱したお湯で淹れてもらったお茶は、やはり一味違う(気がする)。

農園は、ここに暮らす住人が野菜を生産する区画と、近隣住民がそれぞれ好きな野菜を育てるコミュニティガーデンの区画がある。更地にしているところではワークショップも頻繁に開かれている。「カン・マスデウ」では、自由な教育、責任ある消費、都市農業、DIYヘルスケアに関する知識や技術の普及と実践に常に力を入れている。

25人の住人は3週間に一度ミーティングを開く。また、毎週木曜は全員参

加の作業日として、建物の改築、清掃、そして食糧の生産を行う。作業部会ごとにも、作業の日が決められている。毎日の食事は一人が月に約2回、25人分の調理をすることでまわされる。

「カン・マスデウ」は、2001年の12月に、反グローバリゼーションの活動家たちによって占拠された。翌年3月に、気候変動に対峙する活動家の草の根ネットワーク「ライジング・タイド」が中心となり、200人の規模の集会を当該地で開催する。それをきっかけに、パーマカルチャーを実践するオクパとして「カン・マスデウ」は活動を始めた。近隣住民、コルセローラ自然公園、また社会運動の3つの領域との連携を主要テーマとして、コミュニティガーデンを組織し、立ち退きにも抵抗しながら、反グローバリゼーション運動やメーデー、イラク反戦運動などに積極的に参加。農村部のオクパやエコロジカル農業に携わる人びとのネットワーク構築にも尽力してきた。2011年5月に起こった「インディゲナドス(怒れる者たち)」の広場占拠(15M)にも、もちろん参加している。

「正しい」生活を選んでいくというこ

とだけで満足することなく、権威頼みの政治に与することも、消費社会にこびることもない。あくまでDIY・草の根の力によって社会変革を目指す「カン・マスデウ」には、自然環境だけでなく、社会環境と精神環境も含めたエコロジーの実践がある。

新刊紹介

「ジョージ・ソロス一家はいかにしてナチ党支配下のハンガリーを生き延びたのか」。ハンガリー生まれの法律家、著述家で、投資家のジョージ・ソロスの父でもあるティヴァダル・ソロス。本書は、第一次世界大戦従軍中にエスペラントに出会い、エスペラント雑誌『リテラトゥーラ・モンド』の編集長も務めたこともある氏の自叙伝。

「ナチス・ドイツに占領されたハンガリーの首都ブダペシュト。ユダヤ系ハンガリー人の法律家ティヴァダル・ソロスは、妻と義母、そして二人の息子や親しい友人たちとともに生き延びるために、「仮面」をつけて生活する道を選択した。極限状態にあっても冷静さとユーモアを失わず、偽造の身分証や隠れ家求めて繰り広げられる頭脳ゲーム。結果



として、家族の全員と数多くのユダヤ人の命を救ったティヴァダルが、濃密な1年弱の経験を語った(紹介文より)

●ティヴァダル・ソロス著、ハンフリー・トンキン編(監訳・山本明代訳・三田地昭典、コーディネーター・安藤紫)『仮面のダンス』現代企画室 四六判404頁 6月下旬刊行 定価2200円+税

アナキズム文献センター通信第39号

発行/2017年6月30日
発行所/アナキズム文献センター
編集/運営委員会
連絡先/〒160-0022 東京
都新宿区新宿1-30-12 302
郵便振替口座/

008500330010

口座名 A文献センター

Eメール/contact@cira-japana.net

定価/一部100円